

第30回総合教育会議

○藤崎総括監

それでは、これより第30回佐賀県総合教育会議を始めさせていただきます。

本日の会議の進行を務めさせていただきます政策部政策総括監の藤崎でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

本日は知事、教育長、教育委員の皆様のほか、平尾政策部長も出席しております。

それでは、開会に当たりまして、山口知事から御挨拶を申し上げます。

○山口知事

今日は牟田委員が最終回と聞いております。本当に12年間の長きにわたり、御尽力いただきまして、ありがとうございます。

本当に教育委員というと牟田さんがムードメーカーだったので、牟田さんの意見を取り入れて、よくなつたこともいっぱいあって、感謝の気持ちでいっぱいです。

牟田さんの最終回はどのテーマがいいかなと悩みました。短期大学の学長との意見交換で進路指導に対する意見が出まして、実業高校で進学の指導ってどうやっているのか、国公立にちょっと偏重していないかとか、いろんな意見が出たんです。そもそもこの指導という言葉自体も適切なのかなと私は問題意識を持っていて、やっぱり自分で進路は決めるものですね。先生に指導され、決めさせられるものではないと思うので、たかが言葉だけど、でもあのとき、あの先生の言葉があったから、いい方向性が選べるという子供たちもいっぱいいると思うので、実はなかなかこれは難しい問題、私としてはやっぱりアドバイスとか、いい助言であって、あくまでも本人が自分の進路を決めて、うまくいくこともあります。いかないこともある。そのほうがきっといいのかなと思っています。ぜひ今日は牟田さんの最終回にふさわしい、未来に何かが残るような、意見交換となるようよろしくお願ひします。

○藤崎総括監

それでは、会議に入ります。

テーマは「高校生が納得できる進路選択のために」ということでございます。

ではまず、私のほうからちょっと説明をさせていただきます。

先ほど知事の挨拶にもありましたが、学校現場で進路指導という言葉を当たり前に使っていますし、先ほどの大学側からの意見がありましたが、先生は生徒に対して、国公立大学を優先して進めているのか、短大とかより4年制大学を優先しているのか、今入試の体系もいろいろ複雑になってきていますが、いわゆる共通テストの対応を重視しているのか、地元の大学よりも県を優先して進めているのか、など様々な問題意識があります。

また、進路指導の現場で、早くからこうなりたいという目標を持っている子もいれば、進路を悩んでいる子もいて、実業高校で就職か進学か迷っている子もいます。タイミングがそ

それぞれ違う中でどのように対応されているのか、どういうふうに提案しているのか、タイミングはどうなのか、情報提供はどんな感じでされているのかいうようなことも考えています。

卒業生は実際にどういう道のりを進んだか、卒業生の声などが提供されているのか、学校の中でどのようにされているのかが分からないので、実際どうなんだろうということで、今回、テーマにさせていただきました。

ここからは投げかけという形で、教育委員会のほうから少し現状なり、実情なりを御説明いただければと思います。

○甲斐教育長

実際高校でどんな思いで、何を大切にやっているのかというのを少しまとめてきました。

進路選択というのも、これは紛れもなく主語は生徒です。生徒自身がやりたいこと、どんな人生を送りたいかというところ、ここが大前提だよねという話をしています。

先生たちの状況はどうかというと、高校に入学した時点ではっきり、進路目標は自分はこれだとはっきりしている生徒もいれば、漠然としている生徒もいます。それまで育ってきた環境などもいろいろあります。高校3年生になるときには、自分が納得いく進路を決めなければいけないので、どのような思いで教員がサポートしているのかというところ、何を大切にというのは、やっぱり主語は生徒なので、生徒自身しか答えを持っていないよねと。最後まで頑張れるというのは、納得の質なんだよねと。先生が言うからとか、親がここにしておきなさいとかじゃなくて。もちろん、目標がそんなに早くから決まらない子もいます。途中で変わる子もいます。悩むのは当然。それを納得した進路を決める手助けというのをチームで支えるということで、3者面談とか、2者面談をする。担任の先生は一つの教科だけだったりするので、そのほかの教科では、この子供はどんな状況だ、部活はどうだ、生徒会ではどうだ等いろんな情報がいっぱいありますね。学年、学校全体で、情報を集めて、担任は進路指導に当たる、指導がどうかということはありますが、オーダーメードの伴走支援と言えるよねというところでまとめております。

いわゆる○○優先、○○重視等の件について、その背景、要因、考えられるものの話をし てみました。

まず、生徒や保護者の国公立志向というのはデータから見て取れます。

ただ、ここの2つはあくまでイメージだと思うんですが、3つ目の費用が安いというところは、事実としてあると思います。

実態はどうかというと、1年から3年まで、学年が上がるにつれて国公立大学を志望する生徒は減少しています。

○山口知事

どうして。

○甲斐教育長

いろいろあります。

県外優先というのもありますし、数が少ないと学部・学科の幅が狭い。生徒というのは学部・学科の選択と並行して、保護者とも話しながら、現実的にはどこの大学にしようか、通えるところなのか等考えます。これも傾向がありまして、学年が進むと、県内や近隣県を希望する生徒の割合というのが増加します。この2つは、荒木先生が高校生の進路の実態調査、意識調査をしてくださっています。

それで、あと4年制大学優先というのがありました。これはやはり価値観の変化、これも全国的な部分だろうと思っていて、私たちも押さえておかなきゃいけないのは、短大、専門学校というのは、なりたい職業というのがはっきりしていて、取りたい資格というのもはっきりしている。そういう場合には最短コースで実践的な学びができるので、自分がなりたい職業に早くつけるといったことや、規模が比較的小さいので、手厚く支援していただけるといったメリットがあります。生徒さんの状況に応じて、アドバイスをすることが必要だと思っています。

一般選抜、共通テスト重視なのかという件に関しては、状況として、国公立大学は一般選抜の枠のほうが多いです。総合型選抜の難易度とか、選抜方法というのは様々なので、個別に対策が必要です。ある一定レベル以上は基本的に併願ができない。事実上できないか、禁止されているのが多いので、落ちたときのことを考えると、共通テストにも申込んでしっかり対策をしなければいけないというところがあります。

あと、私立大学も、それぞれの学校で入試問題には特徴がありますので、個別に自分が行きたい大学というのはしっかりと対策を取らないといけないんですが、幾つか受けようと思うと、共通テスト利用というのが、便利なところがあります。そういうことを戦略的に考える必要もあるんだろうなと思っていて、ここに書いてあるんですが、一般選抜は保険的な側面もあります。

あと、私大専願、ここに行きたい、総合型で第1志望はここだという子供たちには個別に指導をしていきます。

次が、具体的な事例をちょっとうちの教育振興課の笹谷課長から。

○教育振興課 笹谷課長

失礼します。進路指導の事例について御説明します。

高校1年から2年のときの生徒についてですけれども、この生徒は女子の生徒で、2年から担任をしておりまして、2年、3年と担任をした生徒の事例です。

1年生のときは英語が得意で、数学が苦手ということで文系を選択して、外国語が学べる4年制の大学に進学したいということで、ぼんやりとした形で選択をしておりました。比較的こういう生徒が多いかと思います。

2年から担任したときに2者面談、生徒と私で面談をしているときに、外大を出た自分の

姿が想像できないというようなことを相談してまいりました。自分なりに考えて、悩んだ末の私への相談だったのかなと思っております。

当時、授業では志望理由を書けるようになる。なぜその大学に行きたいかを自分の言葉でまとめるようにしようという授業をしていて、自分で言語化するときに詰まるような気がするという話をしてくれました。

実際、本人が思っていたのは、2年生の半ばぐらいから医療系に行きたいと。自分はハンドボール部に所属して、社会人も一緒に練習をしている。社会人のトレーナーの人の話を聞く中で、体を動かしながら、なつかつ、けがをした人や困っている人たちを助けられるような職業に就きたいということで、医療系を考えているんだという話をしてきました。

医療系となるとほとんどが2次試験で数学や理科という理系科目が多いということで、ちょっと悩んでいるということで相談を受けました。

まず最初に、文系なら本当に行けないのかどうか、まず自分で調べてみないかということを言いました。実際には私のほうも並行して調べていましたが、本人が見つけて自分で選択したという過程がとても大事なんじゃないかなと思ったので、調べるように話をしました。

実際、彼女にアドバイスするために幾つかの大学を提案する予定にしておりましたが、偶然にも彼女が希望した大学と、私が考えていた大学が一致しましたので、文系からも行ける、理学療法士になれる学科があると。じゃあ、これに向けて頑張っていこうかということで進路希望を大きく変更しました。

実はここまで見ると、私と生徒だけで話しているように見えるんですけども、実は並行して、学年団、学校全体に対して行う進路検討会のほうで、この案件については諮っていました。担任としての判断というのには、自分なりの自信はありましたか、間違っていないか、第三者の目で見てどうなのかということを十分吟味した上で、学校全体で、チームとなって彼女の進路の選択の分析を行いました。

センターの得点はどれぐらい取ったほうがいいのか、2次試験はどうなのか。2次が国語、英語、面接試験なので、彼女はセンター試験まで乗り切れば第1希望のところに行けるという検討会の結果を受けて、本人に話をしました。

それともう一つが、3者面談で保護者に話を聞くということにも力を入れました。

3者面談、生徒と私と保護者でやるんですが、生徒の時間はできる限り短くして、保護者の本音を聞くという時間をとても大切にしました。このシステムは結構採用されている方が多いので、3者面談で保護者とじっくり話すということはとても進路指導をする上で大事なんじゃないかなと思いました。

担任をして進路指導をしたときに心がけていたことは、基本的には広い心で自分からゆとりを持って生徒に接すること、生徒と伴走して、一緒の方向を向いていながらも、少し先を見据えて、アドバイスは基本的にはマイナス思考ではなくて、建設的なアドバイスをするということを心がけていました。

卒業後、本人と話す機会があったときに、当時どうだったという話をしたら、集中してい

ないときは厳しく諭してくれるし、何やかんや言ってもちゃんと見ててくれる人がいるんだと思ったら心強くなって踏ん張ることができたということを話してくれました。

1人の生徒の分かりやすい進路変更を一例として挙げましたが、当時40人担任をしておりましたので、アプローチの仕方や、接し方についてはそれぞれ違いますが、40人の生徒に対して同じように行っておりました。進路主任もしておりますので、そのときには1学年320人に対して、担任らと一緒にやってきたと思っております。

ちょっと早口になりましたけれども、以上が事例になります。

○甲斐教育長

いろんな子の進路の選択は様々ですし、今は大学とか、進学のほうを中心に、もちろん就職もありますし、多様な選択肢から生徒が自分で自分のことを決められるということの支えをやっていきたいと思っています。総合型も本当に今、増えてきています。そして、高校のほうでも探究学習というのに力を入れてきていますので、それに力を入れている学校というのも増えてきています。

例えば、致遠館のSSH、スーパーサイエンスハイスクールであったりとか、小城高校のオンリーワン活動とか、唐津西高校がコースを設けて、総合型選抜で進路を実現していくようなところも、ここは今から結構、個別オーダーメード性が高くなるかなというふうに思っています。

○山口知事

みんなさ、社会が大きく変わっているってすごく実感するわけよね。昭和の頃の進路指導ってやりやすかったと思うんですよね。だけど、今ってさ、普通に勉強できる、できないだけで社会は動いていないので、転職もこんなに多い時代だから、そういう社会像を進路指導する先生がある程度分かっていただいているのかなと思ったりするわけです。ずっと同じ伝統芸能のような進路指導、その辺りはどうなのか。

○甲斐教育長

その辺りはそうですよね、オーダーメードだし、総合型選抜を言う子も結構増えてきています。だから、個別に応じるしかない。

○山口知事

子供たちって、こんなに多種多様な進路の中で、どうやって自分で選ぶんだろう。

○甲斐教育長

結構早い段階で、OBの方や社会に出ていらっしゃる方に触れる機会を各高校は結構時間をかけて行っているというのはあります。どうしても周りにいる大人の影響だけにな

ってしまうので、いわゆる小学校の頃からキャリア教育ということで、社会に出る機会というのを設定はしております。

○山口知事

荒木さんは専門じゃないの。そうですよね。

○荒木委員

調査のほうをTSUNAGIプロジェクトでさせていただいて、お手元に資料を配っております。グラフがあって、これは昨年、文化教育係の御協力を得て、対象者が1万5,900人いるところを1万1,000人の県民の中高生にアンケートを取ったものです。

さっき教育長から御紹介がありましたように、高校1年生から3年生になるときに、学年別で見るとブルーの国公立、高校1年生のときは半分ぐらいが国公立に行くぞと言っているんですが、高3になると私立だったりが増えてくると。これは恐らく偏差値とか、成績とか、そういうものなんだろうなと思っています。

次が、あなたは大学や専門学校に行く際にどの県に行きたいかみたいな話をしたときに、私は福岡だったり、本州だったりに行くという子がすごく多いんだろうなと思いながらつくったんですが、意外にも高校1年生の段階から佐賀県を選択している子が多く、1、2、3と段階を踏むごとにブルーの佐賀県だったり、福岡だったりが増えていて、進路指導の段階で先生から外のところに行ったがいいよと言ったりだとか、本人自身も昔ほど県外志向というのは、ないんだなというのがよく分かりました。

最後に、これは多分後でまた説明があると思うんですが、進学先を選択するときに何を重視するんですかという質問をしたときに、一番上が大学や短大の学部・学科が一番トップですというお話をさっき教育長がしてくださいって、それはそうだろうなと。学部・学科がどこでもいいですよと言って、進学する人というのはほぼほぼいない。だから、学部・学科が選べるように大学側もしていかないといけないなと思うんですが、私がやっぱりなと思ったのが、実家から通えるか、一人暮らしができるのかというのをそれぞれで聞いたんですが、これも私は一人暮らしをしたいという子はすごく多いと思ったんです。だけど、特に女の子はやっぱり実家から通えるというのが一つの大きな要素になっていて、実家から通えるからこの進学先を選ぶんですという子が予想より多かった。他県に行って、本州に行って、都会に行っていろんなことを吸収したいよというよりも、しっかりこの佐賀の地で勉強して、勤めたいというような人が多いんだなあと。佐賀って、皆さんに求められているんだなというのを思いながらつくったデータでございます。

○山口知事

進路指導という言い方って昔からだよね。

○甲斐教育長

そうですね。指導というか、伴走支援、相談、サポートという言葉もあります。指導という言葉には強制するイメージがすごく強いなと思います。生徒指導みたいなところがあつたから。

○山口知事

生徒指導という言葉はまだあるんですか。

○甲斐教育長

今は割と生徒支援部とかに変わっては来ています。

○山口知事

でも、進路支援だと、やっぱりちょっと違う。

○甲斐教育長

だから、指導と言いながら、生徒は違うと思ったら従わなくていいんだよというのを言う部分もあるのかなと思いますよね。

○飯盛（いさかり）委員

呼び方はともかく、今日、進路指導のを長くやっている方の話を聞いてきましたが、正直言うと、高校時代にやっておかないといけないこと、身につけさせないといけないことに集中したいと。でも、3年生はもう1学期ぐらいから動き出しますので、選択肢がいろいろ出てきて非常に忙しくなるという実態のようです。

高校に入学してきたときに、はっきり進路を明確に言えるのは1割から2割じゃないかなと。それ以外はやっぱりあやふや。ただ、就職か進学かということについてはある程度しっかりしたものを持っている印象があるということでした。

そこからスタートして、何回も面談を繰り返しながらやっていくんですが、いいなと思ったのが、学校側は無理だと思っても、本人の意思で受けて、落ちたとしても本人が納得がいくと。受けてよかった、自分のことも改めて分かったというような話もありました。

あとは、令和6年度の本校の4年制の大学の合格の割合実績ですが、一般が45%、総合型が21か22%、学校の推薦枠で入ったのが30%ちょっとというぐらいの割合なんだそうです。うちちは進学科があったり、一般の、普通高校みたいな探究文理という学科があったり、あとは情報ビジネス、商業系とか福祉系もあります。

○山口知事

もう一つ聞いたかったのは、最近、推薦枠とか増えているじゃないですか。それって、僕

らの時代ではあんまりなかったので、どんな感じなのか教えてください。

○教育振興課 筧谷課長

大体8月末ぐらいまでに大学から指定校枠が来ますので、同じ日に一斉に教室に貼り出します。そして、希望する人は、担任の先生を通して進路指導部のほうにということで、一応皆さん全員平等にするような形にしています。

○山口知事

どうやって選ぶんですか。

○飯盛（いさかり）委員

推薦会議があります。

○教育振興課 筧谷課長

どうしてここで学びたいのかという志望理由書を書いてもらいます。当然競合するような学部もあります。各校1名というのもあります。

○山口知事

それはもうほとんど最後は先生が決めるんですか。

○教育振興課 筧谷課長

そうですね、推薦会議のメンバーで決めます。最終的には校長先生が推薦をするという形になります。

○飯盛（いさかり）委員

総合型選抜、それは机の上だけの数字で決めるんじゃなくて、いろいろな能力をというふうなうたい文句でスタートしたと思うんですが、学力はどうでもいいんですよというのを誤解しているような気がします。国公立が総合型選抜をするのは、ある程度の学力はもう当たり前、その上で問われる問題が出されていると。ところが、生徒が欲しくてたまらないところは、総合型選抜で早く決めてしまう。もうそれは併願ができないからですね。そこがちょっと分かれるところかなと。私立は6割が今定員割れなんだそうです。

○牟田委員

自分たちが思っているよりも、実際の高校生というのはいろいろ情報を持っているなど。僕の娘は高校3年生なんですが、そんなことも知っているのかと驚きます。前提として進路の指導はいっぱいしてもらっていると思うけど、予備校とかに来る雑誌の情報も結構大きいんだなと思いました。

○山口知事

そうなんだ。でも情報が多過ぎて、悩んじゃうよね。

○牟田委員

それはあると思いますよね。情報は持っているけど、自分がどこに住みたい、進めばいいのかというの悩んでいるとは思います。だから、前から言っているように、アルバイトをして社会経験を積んだほうがいいというのは当たっていると思います。

○山口知事

そうか。だから、さっき言った高校1年生の1割、2割ぐらいしか進路が決まっていないのだとしたら、その他は大海原の中で、どういう泳ぎ方でどっちのほうに泳ぐかで迷っている人が多いということか。何もしないうちに高3になるのかな。

○甲斐教育長

ただ、刺激は与えていますので。

○飯盛（いさかり）委員

目を覚ますのがいつかということ。

○甲斐教育長

意識するような機会はいっぱいあります。O Bが来るとか、話をするとか。今は結構キャリア教育に力を入れているから。

○山口知事

力入れているからね。そうしないと危ないよね。

○甲斐教育長

大学を見に行ってみましょうとか、結構、今は機会が多い。私なんか行ったことがなかった。

○飯盛（いさかり）委員

あと、保護者の方の学歴にも大きく差が出てくるというかな。大卒の保護者の方は、ある程度自分も経験があるし、こういうところがあるとか、家から離れたほうがいいとか、兄弟の関係で何人もいるからそんなに無理はさせられないとかという選択肢が多いんだけど、高卒の保護者の方のところは、大体が自分は分からんから、もうこの子の意思に任せていま

すとか、学校にお任せしますみたいな傾向が強いです。

○山口知事

それは大きいかもしませんね。特に佐賀県は、親の世代の大卒は少ないので、それこそいつも県大の話で言うけど、平成の最初は2,000人しか4大に行かなかったのが今は3,500人に増えていて、1.75倍に4大に行く人は増えています。ということは、親の世代は分からないとなる可能性があって、学校や本人に任せることが多い。

○教育振興課 箕谷課長

多いです。

○山口知事

やっぱりそうか。アメリカとかは大体自分で決めているのかな。

○飯盛（いいもり）委員

結構自分で決めるし、アメリカの大学って点数だけじゃなくて、論文がすごく重視されるので、何でその大学に行きたいかというのを書くんですよね。そこが結構比重が大きいから、点数だけ取れても行けないというのがあります。

○山口知事

そっか。じゃ、すごく自分と向き合わなきゃいけないわけね。

○飯盛（いいもり）委員

何でそこに行きたいかというのをしっかりしておかないと伝わらない。その論文を書くのにアドバイスを受けて、お金払って訂正してもらったり、一生懸命作る人が多いです。もちろん、点数も取らないといけないですけど。

あとアメリカの大学に入るためには、センター試験のような試験が、1回だけじゃなくて、何回も受けてその最高点を大学のほうに送るような制度なので、日本のように大学入試の日のためだけに体調を整えて万全にというものではないです。

○飯盛（いいもり）委員

理系、文系が高校の時代から分かれているのも日本独特なのかなと。

○平尾部長

そうですよね。それ言いますよね。

○山口知事

あれは独特なんだ。

○飯盛（いいもり）委員

1年はみんな同じです。2年から分かれるんですよね。そこからもう方向が常に理系、文系と分かれてしまうから、ある程度何か方向性を決めないといけないような感じで。

○飯盛（いさかり）委員

あと、大学まで無償化という議論が今ありますね。国会とかで出ていますが、文科省の幹部の人だったと思うんですが、外国が無償化しているのは入りやすいんだと。でも簡単に卒業できない。日本の場合は入りにくい。だから、その辺と一緒に考えてもらっちゃ困るみたいなことを言っている人がいました。

○飯盛（いいもり）委員

卒業しにくいです。高校みたいな感じで、3回休んだらもうその単位は取れないとか、宿題も毎回のようになりますし、今思い返すとついていくのに結構必死でした。

○山口知事

逆に、そのぐらい大学が厳しかったから、大学進学率があんまり上がらなかつたのかもしれないよね。

○平尾部長

そうですよ。そうです。

○飯盛（いさかり）委員

現役の佐大生にその話をしたら、自分もやっぱりそう思うと。もう4年生なんんですけどね、卒業の今、卒論を持っているだけかな。やっぱり受験勉強の苦労のほうがきつかったという話をします。

○加藤委員

高校での進路の考え方というところだと思いますけれども、中学校から高校に上がるときに、やっぱり中学校は学力で、先生があなたはここだねという範囲の中で決めちゃう。なので、あなたのランクだと工業高校ですよとか、普通科ですよというふうに決めちゃうので、生徒たちは何か分らないんですよね。漠然としている。その時点で自分の進路がきちんと決まっている人なんかはほとんどいない。なので、工業に行っても、その先の進路は全く違うのを選ぶんですよ。例えば、調理だったり、美容だったりとか。だから、私は高校の中だけの話じゃないと思うんですよね。

なので、キャリア教育に力が最近入っているんですけれども、やっぱり小学校の頃から少しづつステップ的につなげていく、もうそこで決まっちゃうような感じもしています。

なので、その子が工業高校から、美容とかに行きたい、ペットに行きたいとかいろいろ、工業に行った意味があるのか、別にあるかもしれないけど、そのところが少しずれてきているんだなと思いますね。

○山口知事

逆もあるのよね。産業技術学院の生徒とかに聞くと、普通校に行ってしまったけど、やっぱり工業がやりたかったんだよって。だから、もう一回ここに来てやっているって。工業に行けばよかったよなと。だから、ミスマッチしているところがあるね。

○加藤委員

中学校からの選択でミスマッチが多いのかなと。

○山口知事

キャリア教育は小学校からやっていくといいね。

○甲斐教育長

そうですね。あと、進路がまだ決まらない子というのは総合学科がありますので、総合学科は1年生のときにいろんな産業分野を学んで、6つぐらい系列があって、福祉がいいのか、農業がいいのかと、だから決まっていない子は総合学科という選択肢もあるかなと。

○嘉村副教育長

私は教員になろうと思って大学に行ったんです。佐賀西だったんですが、数学の教員になろうと思って2年まで理系にいたんです。高校2年のときに、教えるのは英語が面白そうと思って、文系に変わったんです。あの頃はできたんですよね、文系に変わるというのが。で、そのまま大学の教育学部に行って英語の教諭になりました。

○飯盛（いさかり）委員

でも、一番多いのは佐大の教育学部、佐賀県の先生になるためには割合的には一番多い。キャリア教育ということで、職場体験というのは今どこの中学校でもやっていると思うんですが、一番最初に兵庫県で98年から始めたということなんですが、あそこはトライアルウイークという実質5日間ですけれども、それをもう30年近く続けているみたいで、その成果がどうなのかなとちょっと興味があります。佐賀の場合は、長くて3日じゃないかなと思います。それも本当に自分の希望しているところじゃなくて、受け入れていいですよというところにしか行けないと。だから、公務員、学校の先生であっても、学校に行けばいいけれども、何か一くくりで消防署にやらされたりとか、そんな感じになっているみたいで。

○山口知事

そこで選ばせれば面白いけどね。

○飯盛（いさかり）委員

兵庫の場合は受け入れ側もそれを理解して、県のためならということで割と広く定着していると。

○山口知事

来年度事業に少しその辺を盛り込んでみようか。

○平尾部長

キャリア教育、そうですね。いろんな選択肢を増やすようなね。

息子が中学のときに、これの中から選びなさいと言われて、でも結局、人気のところにみんな集中しちゃって、違うようなところに回ったと。

○山口知事

でもこれから時代ってさ、自分で決めて、自分でやるのが大事だよね。みんながこう言っているからと同じ列に並ぶのが、もういまいちな時代になっているから、自分で考えるというのをふだんからくせつけるかと。

○平尾部長

その前にしっかりとキャリア教育的な部分をやった上でここを選ぶというような形にやっていかないとね。

○飯盛（いさかり）委員

交渉から自分でさせるとか。

○平尾部長

いいですよね。

○山口知事

なるほど。大人があてがうんじゃなくて、同じ職業体験するにしても、その前の面接シートのところから始めるとか

○飯盛（いいもり）委員

キッザニアってできているじゃないですか。あの話になったんですけど、ああいったとこ

ろに修学旅行で行ったりする学校も結構多くて、行って自分で職業を選ぶという選択肢があると楽しみながら仕事のこともいろいろ学ぶでしょうし。

○藤崎総括監

自分で選んで自分で決めるというのもいいと思うんですが、うちの息子が中学校のときに福祉現場に行ったんですね。それは3日間で希望のところではなかったんですけど、結構いろんな体験とかをして帰ってきて、何か新しい発見というか、多分希望だけで行くと全然行かなかつたけど、いろいろな事を知れたという、そういう意味では別の分野を考えるというところも必要かなと思っています。

○山口知事

体験を幾つかするとしたら、1つはそうやって希望のところをみんなで取り合うというシステムをつくり、もう1個はランダムにはまるとかね。

○甲斐教育長

いいかもしない。結構福祉とか子供のね。

○飯盛（いいもり）委員

その体験、うちでは中学生を年に1回受け入れるんですよ。やっぱり実際、ゼロ歳児とかを抱っこする中学生とかを見ていると、すごくおそるおそるなんんですけど、でも将来、親になる子もいるわけだし、いずれ経験することを経験させるってすごくいいことだなと。

○甲斐教育長

近くに小さな子がいなかつたりするので、そうやって慈しむ気持ちとか。

○山口知事

赤ちゃん少ないからな。

○甲斐教育長

よく赤ちゃん訪問とかやっている学校もありますよね。

○荒木委員

ものづくり産業課さんが理系人材育成をされていて、この間、鳥栖中学校に信州大学の女性の宇宙科学者を連れてくる講演会というのがあって、その研究者さんが、爪は長くて金髪でギャルみたいで、その風貌から宇宙のことが語られて、ちょっと哲学も含めた難しい話をしてくださいました。彼女はSNSがかなりすごい方らしくて、非常に盛り上がって、私た

ちが思う研究者のイメージというのを覆すような、子供たちにとってかなりいい時間になりました。

○加藤委員

佐賀県に残りたい子が多くて、私は本当にうれしかったです。

○牟田委員

やっぱり県立大学だね。

○山口知事

自信が確信に変わってきています。

○加藤委員

うちの学校なんかは、福岡県からも「生徒さんたち、福岡に来てください」という募集が多いです。子供の数が少なくなっているから。もうすごいんですよ、福岡の専門学校が。だから、もうこれだと福岡に押されるよねと。なるべく早く佐賀県に定着させるような形でのやり方というのを、本校でも体験型のキャリア教育という視点でですね、そうするとイメージが沸きやすい。やはり佐賀県は分野が少ないから、福岡に押されがちだなと思います。

○山口知事

しかも、数少ない佐大が福岡県民率がどんどん上がっちゃって、もちろんそれは歓迎するけどね。

○牟田委員

やっぱり経済的なメリットが大きいんですよね。どこかに出すよりも自宅から通ってもらったりがいいし、国公立がいいと。その場合に、やっぱり佐賀は選択肢が狭いから、県立大学をつくって、佐大と競合しても仕方がないから、佐大にないような学部をつくると思うんだけど、そうしてあげないといけないんじゃないのかと。選択肢をまずつくってあげないと選べないよね。

○山口知事

だから、県大もあのブームの頃につくっていたら、状況は変わっていると思うんですよ。その人たちがまたほらここで根差すわけだから。やっぱりここにあるって大事で、だって、玉屋さんだって佐賀大学出身の山越社長がやってくれている。京都から来て、佐賀大学に入って、そういう御縁って何かと大事で、今一緒にビジネスパートナーになるわけでしょう。オプティムもそうだよな。

○荒木委員

ちょっとこれは進路のほうなんですが、郷土愛のセクションというのがあって、高校生にあなたは佐賀を誇りに思いますかみたいなことを聞いているんです。ただ、やっぱり3分の2ぐらいが誇りに思っていると答えてくれて、もう一つは、将来佐賀に住みたいですかと聞いたら、住みたいとか、一回進学とか就職で一旦外に出るけど、やっぱりゆくゆくは住みたいというのが半分ぐらいいるんですよね。だから、中高生たちはみんな佐賀に誇りを持っていて多いんだなと思って、Uターン意識はやっぱり強いですね。それを見てすごくうれしかったです。

○山口知事

総合教育会議の成果もちょっぴりある。誇りの教育とかやっていたから。

○飯盛（いさかり）委員

就職先も増やさなきゃいけない。

○山口知事

そうね。だから、企業も佐賀で何かをやるために人材がいるということがどうしても大事。

○飯盛（いさかり）委員

ロケットは飛んでほしかったですよね。

○山口知事

そう。残念だね。ああいうのがJAXAとうまく連携しながら、いい感じで今、唐津東なんかもそうだけどね。やっている。

○飯盛（いさかり）委員

明るい未来ばっかり。

○山口知事

それこそ、荒木さんが言うように、若い子たちはすごい肯定感が強いの、佐賀の子たちは。だから、誇りに思うのもそうだし、今度の国スポだって一番よかったですというのは10代だし。だから、未来は明るいんじゃないかな。

○平尾部長

住むというベースの部分でいくと、本当に災害がなくて、安心して住めるというのがまず土台としてちゃんとあるので、そこは本当に佐賀のいい強みだと。

○加藤委員

もっともっと P R していいですね。

○飯盛（いいもり）委員

日本のランキング最下位とか言うけど、そんなのは全然。ロサンゼルスはきらびやかだけど、ロサンゼルスより全然佐賀のほうが住みやすい。

○山口知事

ほとんどの人は知らないので、確かに小さい県だし、触れないよね。佐賀の人だって多分、茨城県とか栃木県のことは知らないんじゃないの。

○平尾部長

ですよね、知らないです。

○山口知事

あとは決定的に民放が少ない。それは大きい。やっぱり結局サガテレビからフジテレビにしか上がらない。茨城も同じこと言っていた。関東全部で一つだから、情報が上がらないと。

○平尾部長

だから、やっぱり東京のキー局とかで佐賀の情報がいかに出るかというと、本当に少ないとですね。

○山口知事

N H K に頑張ってもらわないと。

○藤崎総括監

どうもいろいろな気づきとかをいただきまして、ありがとうございました。牟田委員、お世話になりました。（拍手）

それでは、以上をもちまして、第30回佐賀県総合教育会議を終了させていただきます。